

最期まで社会を挑発し、 革命を叫び続けた伝説の芸術家

白黒テレビに映し出される討論番組で、フェルトの帽子を被った一人の芸術家が苛立ち、叫ぶ。

「今は民主主義がない、だから俺は挑発する！」



彼の名前はヨーゼフ・ボイス。初期フルクサスにも参加し、“脂”や“フェルト”を使った彫刻やパフォーマンス、観客との対話を作品とするボイスの創造は美術館を飛び出し、誰もが社会の形成のプロセスに加わるべきだと私たちに訴える。それは“芸術”の概念を拡張することを意味し、大きな批難と議論を生んだ。しかし、どれだけ攻撃を受けても止むことのなかったボイスの挑発は世界中に攪乱を巻き起こす。「社会を彫刻する」という、貨幣経済や権力に管理された社会を創造性によってつくり直そうという試みは、バンクシーを始めとする現在のアーティストにも脈々と受け継がれている。



トレードマークのフェルト帽に隠された“傷”

フェルト帽とフィッシング・ベストがトレードマークだったボイスは、1974年から75年にかけて“汝の傷を見せよ”という作品を展示する。ボイスは戦闘機から墜落し、死に直面しているが、第二次世界大戦中に受けた“傷”こそ彼の作品の“核”であると、このドキュメンタリーは伝える。7000本の樫の木を植えるプロジェクトや、ギャラリーの中で死んだ野うさぎを腕に抱くといったセンセーショナルなパフォーマンスの根幹には、自身の傷への眼差しがあったのだ。



現代に突き刺さるボイスの“挑発”

本作はボイスの未公開の音声や映像など膨大な数の資料、新たに撮影された関係者へのインタビュー映像で作られた、ボイスの創造（アート）と知られざる“傷”を見つめるドキュメンタリー映画だ。ボイスの肉声やパフォーマンス映像は、30年以上前のものであるにもかかわらず、生々しく、力強い。



「誰もが社会という作品を作り上げる芸術家なんだ」

よけいな説明が少なく、しかも洗練されたサウンドデザインが施されていて、よいドキュメンタリーは、それ自身がアートだと思う。

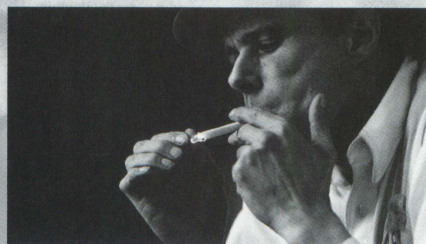
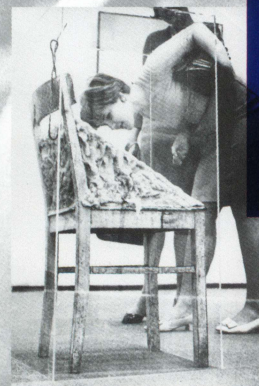
今まで知らなかった、ボイスの繊細さ、傷つきやすさと真剣さ、夢想家と理性の人という両面を知ることができた。

そして「傷」というのがボイスの芸術を解く鍵ではないかということも。

資本主義が終焉を迎えている今、その先を見据えた経済・芸術を唱えたボイスの思考を知る、格好のドキュメンタリーだと思う。

—— 坂本龍一（音楽家）

「本当の資本とは貨幣ではなく、人間の創造性だ」



オンライン映画館

UPLINK

Cloud

全国どこからでも最新映画を!

アップリンクが発行する
ライフクリエイティブマガジン

web

DICE

www.webdice.jp

自己決定 = 創造性 = 自由 = 芸術 / 社会彫刻

2019年3月2日[土]公開!

東急本店右側道 200m先

UPLINK 渋谷

Tel : 03 (6825) 5503

JR吉祥寺駅より徒歩2分 パルコ地下2階

UPLINK 吉祥寺

Tel : 0422 (66) 5042